

我が著書を語る

氷解「倭人伝」～沖ノ島からの幻視

松尾定行（小金井市）

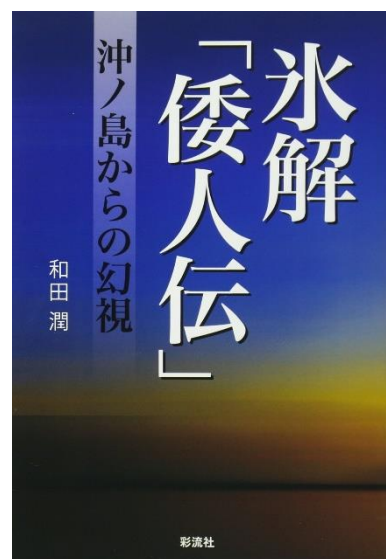
2017年7月末、『氷解「倭人伝」～沖ノ島からの幻視』を、彩流社より、紀行作家・和田潤の名で（会員名：松尾定行）上梓しました。沖ノ島に着目し、沖ノ島から幻視するなら、江戸時代以来「謎だ」、「わからない」、「何かの間違いだ」、「ウソだ、でたらめだ」とされてきた「倭人伝」のほぼすべての事柄がきれいに氷解し、邪馬台国へ到達できる——という内容の古代史紀行でございます。

前著『邪馬台国再発掘の旅——「距離・方位・日数の謎」が動いた——』に次ぐ「晋使北上回帰」「邪馬台国 = 宇佐」説の第二弾でございます。

世界文化遺産に登録されました沖ノ島については、巷間「4世紀～9世紀に同島は国家による祭祀の場となり、奉献された祭祀品が 昭和中期における学術調査で発見発掘され、8万点が国宝に指定されている」といわれておりますが、その「4世紀～9世紀」の怪しさを、第1章で指摘させていただいております。私の「晋使北上回帰」「邪馬台国 = 宇佐」説は「沖ノ島路」の発見にともなう「伊都国 = 宗像」の比定が幻視の第一歩となっておりまして、「2世紀～3世紀にも沖ノ島で祭祀は行われた」が必要不可欠の条件となります。私は「沖ノ島路が古代の国際幹線航路」であり、壱岐対馬経由は本線で、そして対馬宇久島経由は「晋使」があえてたどった影の薄い副線であった——とすることで「狗邪韓国から伊都国までのあいだに横たわる『倭人伝』の四つの謎」を氷解させました。

第2章では、「邪馬台国 = 大和」説の方々が、今なお堂々と「南」は「東」の間違いといえる根拠の一つとして「混一疆理歴代国都之図」（龍谷大学保存）を持ち出されますが、実は、ほかに国内3カ所で同類の地図が保存されており、いずれも日本列島は倒立していない——という事実を指摘させていただきました。

第3章は、ここ数年で私がおとずれました遺跡、古墳、博物館などの紀行文です。そのなかで記紀との関連についてもふれています。ひとり、または2、3人で行ってみたいとお考



えの会員の皆様に、きっとお役に立つものと思います。

前著を発展させました『氷解「倭人伝」～沖ノ島からの幻視』で、私の「晋使北上回帰」「邪馬台国 = 宇佐」説は、先達の皆様に、一つの仮説としてお認めいただけるレベルに達したものと信じるところでございます。

『氷解「倭人伝」～沖ノ島からの幻視』（彩流社刊）価格 2, 1 6 0 円